

田中澄江
カキツバタ群落

カキツバタ群落

昭和四十八年十月八日 第一刷発行

著者 田中澄江

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二 郵便番号 一―二―

電話 東京 (〇三) 九四五―一―一 (大代表)

振替 東京 三九三〇

印刷所 日大印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 八五〇円 落丁本、乱丁本はおとりかえいたします。

田中澄江 昭和四十八年 Printed in Japan

目次

椿谷……………7

つわの野……………81

カキツバタ群落……………171

装帧||三田恭子

カキツバタ群落

椿
谷

福知山を過ぎて、雨になった。

列車の硝子窓を斜めになたなく水滴が、白く光って、すぐに黦ずんで溶ける。

車窓に迫った山々も川の面も、家々の屋根も皆、そのいろに黦りを増すようであった。

この気象の変化は、秋から冬、また、春にかけても、東から、あるいは南をまわって鳥取に
いこうとして、絹が度々、出会ったものである。

丹後の宮津から西に、千米に足りぬ半島の上を、遠く大陸から吹きわたって来た風は、福知山盆地を抜け、二、三百米の高度差をつけた中国山地に突き当って、列車が円山川沿いに、平野部に逃げようとするのを、執拗に追って雨滴を降りそそいだ。

あのひとも、今日の午後、神戸から大阪に出て、武庫川沿いに丹波の篠山から、福知山にむかい、この雨を見て過ぎるのであろうか。

絹はハンドバッグから、白い角封筒を出し、野のないうすい便箋に書き流された、上代様の
仮名書きの、漢字まじりのあとを辿った。昨日、京都のホールの受け付けで渡されていた。

——貴女様の「波の女」の御公演を拝見できませんのは残念でございますが、もしも、足を

おのぼしになって、鳥取におかえりのようでしたら、是非、椿谷の祖母をお訪ねいただけますように。おいそがしい中を幾度かおたよりたまわり、老人はおめもじの叶います日を、心待ちにしているようでございます。

そのひとは、濃い鼠いろの服を裾長に着た、修道女であった。はじめから、あうことまでは考えていなかったように、絹が東京から来ていることだけを聞いて、すぐに帰ったという。茶屋で俳優たちと、厘の部を観たあとの感想を話しあっている時に受けとり、すぐに修道院に電話したが、スール・ローザリイは、神戸にいかれました。明日は米子にいかれますと、短かい返事であった。修道名の脇に峯浦ハツと署名してある。峯浦ツキノの孫にちがいはなかった。

絹が、近松門左衛門の「堀川波鼓」と同じ材料をつかって、近松とはちがう考え方で、「波の女」という戯曲を書いたのは、半年前である。ツキノのはじめての手紙は、その一月あとにとどいた。

因幡紙の厚手のものに、墨いろもほどの濃さで、八十歳に近く、一人住みの嫗にて候が、女の道のけわしさは、昔も今も同じなるさまうかがえて、殊の外に思い深く、拝読申し上げ候と書かれたのが、やはり漢字まじりの上代様の仮名であった。

読者数も少い演劇の専門誌であったのに、高齢のひとの関心をひいたのは、戯曲の背景が、その住む町の鳥取となっているからであろうか。同人雑誌とも言いたいようなその演劇誌は、絹の夫の編集である。絹は読んでくれたことへの礼状を書いた。

返事はすぐに来て、京都の孫娘が、修道院経営の女子大で教えていて、その演劇部の生徒の持っていたのを送ってくれたと書かれていた。老女は、娘とその夫を、神戸の空襲で失い、唯一人残った孫娘は、県立高女から、東京の女子大に進み、卒業後に修道院に入ったこともわかった。

——女学生時代には、疎開中にてあられし御許様を、度々鳥取の町にてお見かけ申候とか。御舅姑様が、長崎より御郷里の鳥取に引揚げられしことも、当時の新聞の消息欄にて拝見、長崎はわがふるさとなるままに、おなつかしく存じあげ候。

舅は戦後間もなく死んだが、姑はツキノより五、六歳の年長である。何かの話題に共通するものもあろうかと、舅姑の住んだ長崎の町名をあげて出した返事に、自分も、自分の姑のシゲカも、浦上の生まれだと伝えて来た。

一五九七年の二月、豊臣秀吉は、長崎の立山で、四人のイスパニヤ人、二人のポルトガル人をふくむカトリック聖職者と、二十人の日本人信徒たちを磔刑に処した。

一五四九年八月十五日に、フランシスコ・ザビエルが、鹿児島に上陸して以来、三十万人の信徒と、三百人の外人聖職者と、二百五十の教会を得たキリスト教は、その唯一神への帰依が、日本の国柄に合わぬものとされ、堅い信仰を憎む苛酷な禁教政策は、くりかえされる血の犠牲に、狂気のおぼろをそがれて、明治に至るまでに、数万人を虐殺した。

一八五八年の修好通商条約によって、日本の港が、欧米の諸国に対して開かれたとき、東洋の布教に志すパリ外国宣教会は、長崎の南山手に、大浦天主堂を完成した。一八六五年の二月、献堂式をあげたが、二百六十余年の空白に、日本人信者の姿を見せるものは一人もなかった。しかしプチジャン神父がひそかに期したのは、激しい弾圧によって、絶滅したように見える信徒の発見であった。

三月十七日の嵐下り、一群れの村びと風の男女が、天主堂への石段を上ってくるのを見た。まだ日本人には邪宗門取締まりが嚴重に行なわれ、見張りの長崎代官所役人が、あたりを警戒している中であつた。

ひとびとはしきりに堂の中をうかがうようなので、神父は期待に胸をはずませて、扉をひらいた。どうぞこれらの男女の中に、キリストの信徒がおりますように。

ひざまずいて、聖母マリアの像に祈った。

起つてすぐに、一人の中年の女が近づいて、胸に手を当て、ささやくように、しかし、はっきりと告げた。

——こけにおるもんは、みんな、あなたさまと同じ心ですばい。

神父は息をのんで、女を見つめた。

——どこの方たちですか。

——おったちは、みんな、浦上のものですばい。浦上のもものは、たいがい、おったちと同じ

心でおるとです。

女は声の半ばに眼をあげた。

——サンタ・マリアの御像はどこ？

殉教者たちの血を吸った大地の底に、まぎれもない信仰の証しをにかけて生きつづけて来たひとたちがたしかにいた。そのよろこびを告げて、世界じゅうの教会の鐘が鳴っていたとき、新しい迫害が起った。

古来の神道をもって国教とした明治政府は、拔身をかざした兵士たちで、浦上の丘々や谷々を被い、村びとのほとんどを、各戸から引きずり出して縄を打ち、数珠つなぎにつないでつころばした。さからわぬものを足蹴にして引たて、家の奥や、天井や、ひと眼にふれぬところにかくされた、祈りのためのロザリオや、メダイや、仏像と見せたマリア観音像も奪いとった。

浦上四番崩れとよばれるこの事件によって、地上にあらわれた浦上のキリシタン三千五百人は、明治二年の正月、富山以西の十万石以上の諸藩に流罪となった。椿谷は、鳥取藩の牢のあったところである。

昭和十八年版の、浦川和三郎師の「浦上切支丹史」に、鳥取に送られたキリシタンの総員は百六十三人、改心帰還と不改心帰還、それに死亡者の数を加えても、なお数名が行方不明とな

っている。

乗りものはどこで捨てたろうか。絹は、浦上の丘の上にたてられた煉瓦造りの大聖堂を、はじめて訪れた日のことを覚えていた。道ばたの家々の庭にコスモスが咲いて、十月のおくんちの頃であった。

大学の文科を出た夫は、以来ずっと勤めることはなくて、結婚後の暮しも、舅からの送金にたよっていた。年に一度は、必らず東京から挨拶に帰る。その日も絹にとって、何度目かの長崎であった。聖堂への坂道を、義弟がよちよち歩きの長男を引っぱって登っていった。義弟は、かつて舅が教えていた医科大学の角帽をかぶり、バスケットボール部の主将をつとめる長身であった。ころびかけた長男をすくいあげるように抱きとると、すぐに肩車にのせた。三歳の子供は、聖堂の扉をあけるまで、はしゃいでわらいつづけていた。中は畳敷きで、自分の家の茶の間から、そのままだん着で来たようなひとたちが何人か、ばらばらにいて、ロザリオをつまぐり、畳に額をつけて祈っていた。高く大きくひろい部屋の中に、ほんのわずかなひとがいて、それぞれの祈りに余念ない姿が、絹のうしろめたい思いを誘った。

絹は学校を出て、結婚まで三年近くを、修道院の経営する学校で、地理や歴史を教えた。三大節というような祝日には、必らず聖堂でミサが上げられ、子供の頃からプロテスタントの教会に通っていた絹には、キリストやマリアの像のある聖堂が珍しかった。

キリスト自身が、そこにおいでになるところだと教えたのは、赴任したばかりの絹に、校内を案内した、七十近い修道女である。

イギリス生まれの、声も顔いろもつやつやとして若いそのひとは、個人学習の狭い部屋で、公教要理を教えてくれた。その始めての日に、「人に最も大事なものは何ですか。人に最も大事なのは宗教であります。」その一行を、少しくせのある日本語で読みあげるのを聞き、絹の眼に涙がわき上った。そういう話しが一番聞きたかったと思い、そのために、この学校が与えられたような気がした。

次の年は、日本人の修道女から教えてもらった。その兄も司祭となり、富士の裾野に病院を建て、癪者の父とよばれているひとである。学校をやめるまで、遂に受洗するには至らなかった絹を、いつでもどうぞと、にこやかにおくってくれた。

プロテスタントの教会でも、絹は、聖書の講義を聞き、讃美歌を歌うだけに励んだのである。

夫や義弟は、別の日に、大浦の天主堂につれていってくれた。ステンドグラスを通す柔かい光りの中に、りりしい顔つきの聖母マリアの像があり、日本信徒復活の記念像とされていた。聖堂は立山の丘に相對して、禁教の最初の刑死者となった、二十六人の聖人の霊にささげられたものである。

絹は受持ちの生徒を引率して、その殉教を描いた映画を観にいったことがある。耳をそが

れ、その血を凍らせ、縄を打たれ、嚴寒の京都の町なかを、馬にくくりつけられて引きまわされながら、なお人間にとって、天地の創造主である神をあがめることが、一番大事なこと。天主は、人間が天主にそむいて得たたくさんの罪を救う為に、イエズス・キリストを地上によこされたこと、キリストはいろいろな不幸に苦しむ大ぜいのひとを助けながら、罪びととして十字架にかかったこと。その御母のマリアは、悲しみに耐えて、最後まで見守ったこと。弱いもの、不仕合せなものは、マリアを通してキリストに助けを求めるがよい。マリアに祈るがよい。

警固の武士たちから、杖でたたかれ、棒でこづかれてもひるまず、声のあらん限りに説く外人司祭の姿に感動した。はじめは二十四人であったのに、進んで、キリストの掛けられた十字架に、自分も共に掛けてほしいと、途中で加わった二人の男の姿に涙を流した。泥濘の道を素足で、陸路二百里をわざわざ殺されにゆくひとびとが、声を揃えて天主を讃える聖歌を歌うのを聞き、いのちを痛苦にさらして、キリストのあとに続こうとするひとびとが羨やましかった。

しかし、感激は、いつも春の雪のように、その場かぎりで消えてしまった。

浦上や大浦の聖堂を訪ねた帰りには、長崎で一番コーヒーのおいしいという店に入り、レコードを聞き、膝に子供をのせ、夫や義弟にかこまれて仕合せな思いなのであった。

絹が受洗したのは、戦後五年たってからである。